

学習者主体のディスカッションによる上級読解授業 の実践 : 学習者が読み物教材を選べる上級読み書 き授業

著者	高屋敷 真人
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	21
ページ	15-35
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005848/

学習者主体のディスカッションによる上級読解授業の実践 —学習者が読み物教材を選べる上級読み書き授業—

高屋敷真人

要旨

関西外国語大学留学生別科の日本語クラスは、50分授業が週に5コマの会話コースと週3コマの読み書きコースに分かれている。本稿は、そのうち最上級クラスであるアカデミックレベルの読み書きコースにおいて2008年より導入、試行されている、自律的な日本語学習を目指したクラス活動の実践報告である。本コースでは、上級学習者の多種多様なニーズに応えるべく、学習者自身にコースで学ぶ読み物を選んでもらい教師側がそれを教材化していくというアプローチを採用している。本コースの立ち上げから2年間の実践を通して得られたこと、学生からのコース評価の結果などを分析し、学習者の自律的な学習を支援するためのコース（カリキュラム）・デザインとリソース型教材（要望対応型教材）を作成する際の留意点やその可能性、また、反省点を踏まえた今後の展望などについて報告する。

【キーワード】 自律的学習、学習者主体、読み書き、ディスカッション、
リソース型教材

1. はじめに

本稿は、関西外国語大学留学生別科において2008年に設置された上級読み書きクラス（Reading and Writing Japanese 7: 以下、RWJ7）で試行されている読解授業についての実践報告である。RWJ7は、本学における日本語コースの最上レベルであり、学習者の中には、既に日本語能力試験N1レベル合格者なども含まれているので、アカデミックレベルでの読み書き能力の向上を目指し、常用漢字を用いてのアカデミックな読み書きが自由にできるようになることというのがコースの最終目標になってい

る。具体的には、一つの読み物について、学生主導のディスカッションを軸にして、週3時間で新出語彙及び表現、漢字の学習、ペアワークやグループワークでの協働作業による内容理解チェック、内容に対するディスカッション・ポイント作成や感想、意見などの交換、小論文作成等を行わせている。

このような超上級レベルでのコース・デザインの際、教師の頭を悩ませるものの一つとして、近年、教材選びやコース目的の設定がしにくくなっていることが挙げられる。そのようになって来た理由は様々考えられるであろうが、このレベルまで学習を続けるような留学生の背景や学習動機、ニーズがこのところ益々多様化し、細分化して来ていることに起因しているように思われる。実際、彼らの多くは、来日前に出身大学において大学院レベルあるいはそれに近いかなり専門的なコースを履修していることが多く、学習歴が長いのは勿論日本滞在経験も様々なものがあり、日本文化や日本事情に対する興味、関心も古典文学、古典芸能、スポーツ、歴史などの伝統的なものから漫画／アニメ、J-POP、ファッションなどに代表されるサブカルチャー的なものまで多岐に渡っている。近年その拡がりや変化の速度は、著しいものがあり、我々教師の想像を超えるようなスピードで変容し多様化、個別化を遂げてきているように感じられる。

オーディオ・リンガル・メソッドからの脱却を図り、コミュニケーション・アプローチの様々な理念を旗印にし、「学習者中心」の日本語教育が提唱されるようになってから久しいが、多くの日本語教師が「学習者ストラテジー」、「チュートリアル」、「リソース型教材」、「個人ファイル／ポートフォリオ／パフォーマンス・チャート」などをキーワードに代表される新しいアプローチを取り入れるなどして、「自律学習」、すなわち、学習者が学びたいと思うことを選択できる自由を有し学習者が自発的に学べるような日本語教育を目指し、様々な実践を試みているようである(伴 2003/2009; 桜美林大学 2007; トムソン木下 2009; 江田他 2005 など)。しかし、上述したような異なる背景や動機を持ち大変な速度で多様化、変容する個々の学習者のニーズをそれぞれのコース、特に少人数の上級コースに反映させ教室活動を実現していくのは容易なことではないかもしれない。「学習者主体」の「自律的」な教室活動を促すような日本語教育の理念を取り入れ、尚且つ、近年特に目まぐるしく流動変化し個別化していく学習者のニーズに応えられるようなコースを作り上げるためには一体どうすればよいのであろうか。以下、関西外大留学生別科 RWJ7 コースの設立に関して、その理念、コース及びシラバス・デザインの背景、実践報告、今後の改善点などについて述

べていきたい。

2. 関西外国語大学留学生別科日本語コースと上級読み書きコース

2.1 コースの構成と使用教材

関西外国語大学留学生別科の日本語コースは、9月開始の秋学期と2月開始の春学期にそれぞれ15週間で開設されている。留学生は、少数の例外を除き（成績優秀な希望者にのみ3学期目の受講を許す）、1学期のみの短期コースか2学期の通年コースで学んでいる。コースは、週5コマ（月曜から金曜まで午前中毎日50分）の会話コースと週3コマの読み書きクラスに分かれており、それぞれ担任教師が個別に担当している。会話コースは必修で、読み書きクラスは選択コースであるが、90%以上の学生が会話と読み書きコースを両方とも履修している。

日本語コースのレベルは7つに分かれており、レベル1からレベル3までが初級で教科書は会話、読み書きとも『げんき』のIとIIを使用している。レベル4が中級前期、レベル5が中級後期で、会話教材は関西外大スタッフによりオリジナルの教科書が作成、使用されている。コース終了時には日本語能力試験N2合格程度の学力をつけるというのがコース設定の目安になっている。レベル6が上級で、N1レベルでコース設定されており、会話教材は関西外大で作成されたものである。レベル4から6までの読み書き教材は、オリジナルのものを使用していたが、現在は市販の中級教科書へと移行をしているところである。しかし、中上級での読み書きコース用の教科書選びは、レベル4から6まで単語／表現、漢字、読み物の難易度等を重複することなく段階的にレベルアップして行かなくてはならないので、担当教師は、レベル間の漢字数や難易度の調整に毎学期、頭を悩ませているようである。そして、最上級のレベル7では、アカデミックレベルの日本語の習得を目指している。レベル7での教材選定は学期ごとに担当教員に任されており、毎学期市販テキストや生教材を適宜併用して教材選びを行っている。本稿で取り上げるのは、このうち、筆者が2006年からコース・デザインを任せられ運営しているレベル7の上級読み書きコース(RWJ7)である。

2.2 担当コースの決定とコース・デザインにおける問題点

本学留学生別科では、コース開始の1週間前にオリエンテーションが始まり、その1週間でプレイスメント・テストとクラス分けを行わなくてはならない。毎学期、400名前後にのぼる大勢の留学生を受け入れているのであるが、1週間という短期間でテ

ストからクラス分けまで行い、担当コースもその期間に決定されることになる。クラス運営は、担任制で行われており、一クラス 10 名から 15 名の少人数制（読み書きコースは 20 名まで）で、例えば、会話コースであれば、一人の教師が月曜から金曜まで同じクラスを担当し、15 週間教えていくことになる。自分が担当するコースは、授業開始の数日前に知らされることになるので、もちろん先学期に同コースを担当した教師のカリキュラムや教材を再利用できるとしても、短期間でコースとカリキュラムのデザインを考えていかななくてはならない。理想的には学生のレディネス調査やニーズ調査もこの時期に行い、その結果を担当コースに反映し、学習者の実力とニーズに見合う教材や教室活動を選定していきたいところである。これは、教科書によってある程度進度やシラバスが自動的に決まる初級コースとは違い、上級コースでは特に切実な問題であると思う。しかし、自分の担当コースを知らされてから、4 日ほどで授業が開始されるため、そのような準備に割ける時間を持たないまま暫定的にカリキュラムを組んでいかざるを得ない。筆者もコース開始後、実際の留学生の学習歴、最初の授業での学習状況などを観察し、自転車操業的に暫時、カリキュラムに修正を加えて行くようにはしているが、コース開始前にもう少し十分な準備期間があればと思うことがある。教師側は、今までの経験知から、学生の要望やニーズをできるだけ事前に各々の担当コースの学習シラバスに組み入れるように試みているのではあるが、やはり学期中に教案を随時軌道修正し、学生に合った副教材を作成していくなど苦心が多いようである。

2.3 アカデミック読み書きコース 7 (RWJ7) の概要

毎学期、400 名前後の留学生のうち、RWJ7 レベルまで到達している学生は、それほど多くなく、一クラス毎学期 6 名から 10 名ほどで構成されている。このコースの目的は、

1. アカデミックレベルでの日本語の読み書きができるようになること。発表のためのいろいろな分野の文献・資料を読み、それをもとに発表用原稿やレジュメ、小論文などが書けるようになること。
2. 上級レベル（日本語能力試験 N1 レベル）の漢字、語彙、表現を完全にマスターすること。常用漢字（2136 字）すべてのマスターを目指し、日本語の新聞／論文が読めるようになること。

以上の2点である。本コースでは、学習者が発表のための文献や資料を自分で探し出し調べ、その文献資料を利用し、最終的にアカデミックな場所で発表するためのまとまった文章を「である体」で書けるようになることを目指している。毎週3コマの50分授業で一つの読み物を取り上げ、読み終えるように指導しているが、「学習者主体」、「自律学習」、「協同参加型学習」を基本理念とし、学習者自らが能動的に学習過程に参加できるように、具体的に下記のように進めている。例えば、時間割が火曜に1コマ、木曜に2コマ連続であるとする。

1. 毎週、火曜日の授業までに、各自、辞書などを使い、漢字の読みと語彙リストの言葉の意味や使い方を調べ覚えて来る。火曜のクラスで新出漢字、言葉の意味について単語クイズを行う。クイズの後は、教師が用意した、単語／表現の練習シートをペアワークやグループワークで協働的に行う。
2. 毎週、木曜日までに発表担当者（ディスカッション・リーダー）が選定し、教師が教材化したディスカッションのための読み物を読み、各自、質問（ディスカッションのポイント）を3問、考えて来る。木曜の一コマ目の授業で発表担当者（ディスカッション・リーダー）が司会をして、ディスカッションを進める。リーダーが読み物の著者、内容の背景などについて15分ほど発表した後、読み物の内容を各学生がきちんと読んできているかどうか質問などしてチェックする。この時もペアワークなど協働作業で考えさせる時間を設けさせる。その後、考えてきた質問（ディスカッションのポイント）や疑問点などについて、リーダーが司会者となって更に話し合いを進める。教師は、できるだけ、介入を避け、学生側に座り、ディスカッションに加わる。
3. 木曜の二コマ目の授業は、コンピュータールームで行う。ディスカッションで討議したことなどを基にして、教師が用意した質問シートに自分の解答を打ち込む。質問は、内容理解のチェックと自分の考えてきた質問とそれに対する自分の解答、意見を「である体」で書いて提出する。発表担当者は、これとは別に、2週間後までに発表のために調べたことやディスカッション・ポイントについて、授業中のクラスメートの意見なども参考にしまとめ、4,000字を目安に本格的なレポートを書き提出する。
4. 教師は翌週までに各学生の質問シートの添削を行い、論理的な「である体」

での小論文の書き方を個別に指導する。

書く練習は基本的に、木曜2コマ目のコンピュータールームでのまとまった意見を小作文として書かせる作業となる。昨今、論文などはパソコンで打つことが主流であるので、パソコンで正しい漢字を選び打ち込めるようにするために、本コースでは、とにかく徹底して漢字の読みができるようになることを優先して指導している。15週のうち、6週から10週は学生の発表とディスカッションを軸にカリキュラムを組んでいるが、残りの週は、ワンポイントレッスンをやっている。これは、質問シートで実際に観察された学生の誤用や小論文の書き方の問題点などをもとに、教師が「である体」、三段論法、文末表現、接続表現などのワンポイントレッスンとして、その都度、教材化したものを使用している。

3. 学習者による読み物（学習内容）の選定

アカデミックレベル（上級レベル）でのクラス運営、コース及びカリキュラム・デザインにおいて、特に読み書きクラスの場合は特に、教材選び、すなわち、いかに学習者のニーズに見合う教材を選定するかがスムーズなクラス運営に欠かせない重要な要素の一つであると思う。大量消費型の情報化社会におけるインターネットの世界的な普及により国境や言語を超えた文化交流や情報交換が容易になってきたためであろうか、近年の学習者の日本語学習の動機は多岐に渡り、日本（文化）に対する興味や嗜好も上級になればなるほど、専門化、細分化、個別化してきている。昨今は流行語大賞を受賞したことばやお笑い芸人の一発ギャグなども数年ですぐに忘れ去られてしまうような風潮があるが、昔に比べて学習者の興味関心が流動変化する時間的スパンも非常に短くなって来ているように感じるのは筆者だけであろうか。ここ数年、教師側がある学期に選定した教材について、学習者が次の学期にはもう興味を示さなくなるなどということもよく体験するようになった。若い学生の間で一時的に爆発的に流行したもので、そのようなブームは短期間しか持続せず、せっかく教材として採り上げ時間をかけて準備したもので、翌年にはもう使用できなくなってしまうことも多くなって来たように思う。教師側が選んだ、時代遅れになってしまった、魅力のない教材を使用したままでは、学生が自発的に活発に参加するような教室活動は望むべくもないであろう。このような点を考慮に入れ、本学の上級読み書きコースを担

当することになった際、学習内容を教師が一方的に選定、管理する方法ではなく、「学習者が材料を選び」教師に「教材化を依頼」できるような「リソース型教材」の作成（田中他 1993；桜美林大学 2007）、学習者の個々の体験やニーズに基づき学習者が学びたいことを考慮し、学習者の個性や自発性を引き出すようなカリキュラム・デザイン（岡崎他 2003）を念頭に置くことに決めた。

実際、本学の RWJ7 で学ぶ学生にも様々な背景、動機、ニーズを持つ学生がいる。両親のどちらかが日本人であるが海外で生まれ育ち教育を受けた学生、香港や韓国からのアジア系の学生、スウェーデンやノルウェーなど北欧圏の学生、高校で1年間日本に留学経験があり大学の上級コースに編入してきた欧米系の学生等々、学生の母語も国籍も様々である上に、学生の興味も J-POP（最近では K-POP などのアジアンポップ）などの音楽、剣道などの伝統スポーツ、和太鼓などの芸能、アニメ／漫画、日本のテレビドラマや映画、日本料理など多岐に渡っている。留学生たちが一体どのような動機で日本語を学び始め、ここまで勉強を続けてきたのか、今後どのように日本語を使用していきたいのかなどの将来設計も千差万別である。

筆者は 2004 年から担当コースの上級学習者にアンケートとインタビュー形式双方での簡単なレディネス調査、ニーズ調査を行っている。「どのような場面、状況で日本語を使用したいか？」「日本語を使用して、何ができるようになりたいか？」という質問に対する本学留学生の回答は、例えば次のようなものである。

- 日本語とジャーナリズム専攻のオーストラリア人女子学生：「面接の日本語。将来、ジャーナリストとして日本で働きたい。」
- 心理学専攻のオーストラリア人男子学生：「日本語で新聞や小説を読みたい。ビジネス日本語にも興味がある。心理学の本も日本語で読んでみたい。」
- 日本語と言語学専攻のアメリカ人男子学生：「小説やウェブサイトを読んだり、掲示版などでディスカッションに参加したりしたい。基本的にオタク系趣味。」
- 日本研究専攻の香港人女子学生：「発表したりレポートを書いたりするための日本語。ビジネス日本語。」
- 日本研究専攻の香港人男子学生：「通訳になるために日本語の勉強を続けたい。」
- 日本語専攻の韓国男子学生：「字幕なしで日本のテレビなどが見たい。」
- スイス国籍で大学はドイツ、母語はイタリア語の女子学生（日本学専攻）：「日本語で論文が書きたい。」（ちなみに彼女の修士課程のテーマは、日本の東西文化（関

西圏 VS 関東圏) についてであった。)

- 父親が日本人であるアメリカ国籍の女子学生 (日本語専攻): 「日本で仕事ができるようになりたい。電子辞書なしで、新聞や小説がよめるようになりたい。日本の大学院に進みたい。」
- アメリカ人女子学生: 「ポップカルチャー (オタク文化)、文学の日本語、小説が読めるようになりたい。」
- アメリカ人女子学生: 「I would like to have a better understanding of *keigo*. I don't think I will be in a position to use it a lot but I want to understand when I hear it. I also want to learn more about the gender difference in language. For example, what makes me sound girly, manly etc. So that I can communicate better with friends.」
- アメリカ人男子学生: 「レストランで間違ったオーダーが来た時、飲み放題などのシステムを説明してもらった時、電話で旅行予約をする時、マンションを探すときなどの日本語」
- アメリカ人男子学生: 「もっと、男らしく話したい。関西弁などの方言にすごく興味がある。」

このような多様な学生のニーズをすべて満足させるような読み物教材を短期間に教師主導で選ぶのは実際大変困難なことである。そこで、RWJ7 では、ある程度学生自身にコースで学ぶ読み物を選ぶ自由を与え、教師がそれを教材化することに決め、コース (カリキュラム) ・デザインを進めて行くことにしたのである。

4. 学習者支援のためのリソースバンク

学習者に学習内容 (読み物) を決めてもらうと言っても、「さあ、皆さん、このクラスでは、コースの読み物を自由に選んでいいですよ。次の授業まで各自好きな読み物を選んで、持ってきてください!」と言ったらどうなるだろうか。いくらアカデミックレベルの上級学習者と言っても收拾がつかないことになってしまうだろう。そこで、あくまで学習者の自律学習を支援するという形で、ある程度のガイドラインを設け、過去の上級コースで取り上げた読み物教材のうち学生の反応が良かったもの、最新の雑誌/新聞記事などを中心に筆者 (教師側) が選んだ読み物も同時に提示する形にした。つまり、学習支援のためのリソースバンク型教材 (田中・斉藤 1993) としてプールした読み物を毎学期 20~30 くらい用意し、その中から選んでも良いし、

自分の好きなものを他に選んで来てもいいという形にした。また学生にアンケートを取り、どのような読み物（小説）を授業で取り上げてほしいかについても調査し、その結果を教師側が読み物を選ぶ際の参考にした。教師側が選定する際は、できるだけ題材が偏らないように留意したことは言うまでもない。

学習者自身が教材を選ぶ際のガイドラインは下記のようなものである。

1. 自分で好きな読み物を選ぶ。ジャンルは何でもいいが、ディスカッションのためのポイント、小論文のためのテーマを見つけられるものにする。短編小説、社会問題や文化に関する新聞や雑誌の記事、ルポルタージュ、エッセイ、小論文など。
2. 内容が専門的すぎると皆が読んで、ディスカッションするのが大変になるので、気をつけること。
3. 発表する読み物を変更したい時は、自分の発表の三週間前までにコピーを研究室に持って来ること。

過去3年間に本コースでリソースバンクとして取り上げたものは、次のようなものである。

小説：

江國香織『冷たい夜に』より「スイートラバーズ」「デューク」

『冷静と情熱のあいだ』

山田詠美『ぼくは勉強ができない』

よしもとばなな『体は全部知っている』より「黒いあげは」

島本理生『生まれる森』

村上春樹『TVピープル』より「TVピープル」

『カンガルー日和』より「4月のある朝 100%の女の子に出会うことについて」

金城一紀『GO』

石田衣良『14（フォーティーン）』より「月の草」

梨木香歩『西の魔女が死んだ』

白岩玄『野ブタ。をプロデュース』

山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』
水野敬也『夢をかなえるゾウ』
芥川龍之介「鼻」
中野独人『電車男』
寺山修司『寺山修司名言集』
田辺聖子『ジョゼと虎と魚たち』
唯川恵『玻璃の雨降る』
町田康『浄土』より「ギャオスの話」
舞城王太郎『好き好き大好き超愛してる』
佐藤友哉『子供たち怒る怒る怒る』より「欲望」
金原ひとみ『蛇とピアス』
綿谷りさ『蹴りたい背中』
片山恭一『世界の中心で愛を叫ぶ』
モブノリオ『介護入門』
安部公房『カンガルー・ノート』
島田雅彦『そして、アンジュは眠りにつく』より「茶の間を旅して」
(順不同)

このうち、留学生が自ら選んで来て、リソースバンクとして定着したものに『西の魔女が死んだ』、『夢をかなえるゾウ』、『生まれる森』、『冷静と情熱のあいだ』、『ジョゼと虎と魚たち』、『玻璃の雨降る』などがある。また『電車男』、『世界の中心で愛を叫ぶ』など数年前にテレビ化、映画化されたものが留学生の間でも大変人気があったのであるが、去年あたりから選ぶ学生が少なくなっている。流行につれ、学生の興味、関心も移り変わることがよく表れているところであると思う。

上記の作品のうち、長編小説の場合、教師側がディスカッションのポイントとなる場面を含む部分を 7~8 頁分くらい選び指定した。発表者にはできるだけ長編小説のすべてを読み、あらすじをクラス発表で紹介させるように指導した。また発表者以外の学生が長編小説を 1 週間で読むのは不可能であるので、テレビドラマ化、映画化されたものがある場合はそちらを見て、全体の内容を把握させるようにも務めた。

これら小説を読み物として採り上げた際、留学生に自分でディスカッション・ポイントを考えさせているのだが、例えば、『GO』では在日コリアンの問題、国籍とナシ

ョナルアイデンティティーの関係について考えてくる学生が多く、毎回大変興味深いディスカッションが行われている。その他の例としては、「月の草」では、いじめと拒食症の問題、『生まれる森』や『人のセックスを笑うな』では、年齢差のある恋愛について、『西の魔女が死んだ』では、自分で決め自分で責任を取るなどがディスカッションのトピックとして採り上げられている。

新聞、雑誌記事は、ディスカッションの話題にするのに適したものであるかどうかを考慮し、下記のようなものをリソースとして選んでいる。

新聞／雑誌記事：

- ▶ 朝日新聞特集記事：「18歳は大人だと思いますか?」「インターネットのスラング」「インターネットカフェが僕のうち」「ユニクロって好きですか?」「君と暮らす新生活 シェアハウス?」「元恋人と友達になれますか?」「買わない若者、どう動かす?」「常用漢字を増やすな、日本語が減びる」「大学生コンパ 男が多く払う?」「いつまでガイジン?」「SNS って何?」「外国人労働者、受け入れますか?」「天皇制ゆっくり考える好機」「アンハッピー・マンデー」「ケータイが変わる」「主人=夫?」
- ▶ アエラ：「女性はなぜ一人でそば屋に入れない?」
- ▶ ELLE：「今シングル男性に何が起きているか?」
- ▶ クーリエ・ジャポン：「世界の幸福先進国デンマーク」「アップルが切り開くメディア新時代」「韓国パワー恐るべし：サムソン」「ユニクロは米国に進出できるか?」

(順不同)

このうち、最近、学生が自ら選んできたものに、女性雑誌 ELLE の「今シングル男性に何が起きているか?」とい記事があった。この記事は、最近、日本人の未婚男性が草食化し恋愛に積極的ではなくなっていることについての記事で、草食男子、肉食女子などのトピックについて学生が楽しそうにディスカッションを進めていたのが印象的であった。その他、近年の傾向として、「一緒に飲みに行った場合、男性が多く払うべきか?」を取り上げた「大学生コンパ」、女性は立ち食いそば屋や吉野家、ラーメン屋などに一人で入りにくいのはなぜか考える「女性はなぜ一人でそば屋に入

れない？」などジェンダーに関するトピックも人気が高い。また、ミクシィやフェイスブックなどの SNS やインターネットに関しても最近の学生にとっては生活に欠くことのできないものようであり、普段クラスであまり発言しないような学生も積極的に議論に加わり、ディスカッションが白熱化していた。

その他、学生が選定したもののうち面白かったものとして、日本の現代舞台芸術専攻の学生が寺山修司の詩集『寺山修司名言集』を取り上げたり、日本文学専攻の学生が芥川龍之介の『鼻』、日本のレゲエ音楽 (J-レゲエ) が好きな学生が lecca という (日本人) 女性レゲエ歌手の歌の歌詞を選んで来たりした例があった。教師がこのようなものを選ぶと時に拒絶反応を示す学生もいたりするが、そのような学生でも同世代のクラスメートがなぜそれを選んだのか、なぜクラスメートに読んでもらいたいのか説明するのを聞いているうちに興味を示し、集中力を切らさずに討論に参加しているようであった。例えば、前述の lecca という女性シンガーのファンであるオーストラリア人の女子学生は、『パワーバタフライ』というアルバムより「Gambling」(作詞作曲: lecca) という歌の歌詞を選んで来た。

Gambling

声そろえて叫び始める 現代社会の常識は
夢、情熱より安定を求めて生きる賢さ

X デイのリーマンショックで資本主義はもはや時代遅れ
夢を見るのもいつしか忘れ ツワモノどもは雲隠れ
求める幸せは so so 計算して憂える老後
貯められるうちにもっと切り詰めてゆかねば？

☆ We're all gambling そう、イチかバチか
We're all gambling 為すか為さぬか
We're the gamblers 賭けるのは
このちっぽけな命

☆☆ Gamb-gambling, let's stand in 試しに行こう
どんな場所にも絶対ない なら思うようにいこう

Gamb-gambling, let's start up 使い切って行こう
賭けないなら負けと同じ don't wanna be a loser

☆☆☆ O oh, oh, oh 一思いに

O oh, oh, oh 賭けちゃえばいい

O oh, oh, oh 今しかない 今しか選べない Gambling way

エゴだかエゴだか分からない その場しのぎは終わらない
こんなに止めてちゃまわらない よりよい人生への渴望
無駄を省いて小さく生きる 先が見えなきやさっさと切る
こんな時代をチャンスと見る 私ならもっと
無駄でもなんでもでっかく動く けちにならずにバカになる
好きな男は即座に口説く どうして生きる、まわりくどく
「何か為すよりブナンに暮らしてお部屋でぬくぬくしていたい」
そんな時代に誰がした？って疑問と焦りならゆるぎない

☆ repeat

☆☆ repeat

時代は 2010 なんだって選べる世界中
若いのにチャンスものがす そこにはただよう加齢臭
うのみにするアリとキリギリス ほんとは生き方なんてピンキリ
ギリギリはどちらの方かな まさか歌は忘れない
Bet my life ... 勝てば手に入る
Bet my life ... 他にない成功
Bet my life ... 負けは認めない
Bet my life, so get your life

筆者は、はじめこの学生に J-レゲエシンガーの歌の歌詞でもいいかと打診された時、果たしてアカデミックレベルでの表現練習やディスカッションができるものか危惧し躊躇したのだが、上記の歌をはじめ彼女が選んできた三つの歌の歌詞はどれもメッ

セージ性が高く、漢字二字熟語なども多く入っており教材として申し分のないものであった。ディスカッション当日は、今後の人生において、安定を求めて保守的に生きていくほうがいいのか、あるいは、自分の夢や本当にやりたいことにリスクを冒しても賭けていくべきなのかというテーマで議論が盛り上がっていた。また、歌に込められているメッセージについて、発表時は実際に歌のプロモーションビデオを見せたりして、学生の興味をひき、ディスカッションへのモチベーションを高めることにもなり、結果的に非常に教材として有用なものになった。私はこの lecca という女性シンガーについて全く知らなかったのので、このような歌を教材として選ぶ可能性は皆無であったが、学生に読み物を選ばせることによって同世代の学生の興味関心に合致した教材を選ぶことができた成功例の一つとして記憶に残っている。

5. 1 週間 3 コマのクラスの流れ

本コースでは、コース開始の 1 週目の三コマで、学生にオリエンテーション、読み物選定を行い、スケジュール等授業内容を決定している。このように決定されたシラバスは、あくまで暫定的なもので自分の発表の 3 週間前までであれば、自由に読み物を変更していいことにしている。1 週間で一つの読み物を終えるわけだが、週初めの一コマ目のクラスでは、語彙テストと語彙表現練習用シート使用しているが、これは学生が選んだ読み物をベースに教師が教材化したものである。学生にはクラスメートが選定した読み物と語彙リストを渡しているが、語彙がレベルに合うかどうか前の読み物と重複していないかなどを考慮しながら作成し、1 週前に渡すようにしている。リストは選定した単語と漢字の読みが書いてあるだけなので、学生はリストにある語彙の漢字の読みを覚え、単語の意味を各自、辞書などで個別に調べて来ることになっている。下記は、江國香織の「スイート・ラバーズ」に出てくる語彙／表現を教師側が教材化した一例である。

I. 体に関する^{かんようひょうげん}慣用表現^{しかく}：四角の中から^{てきとう}適切なことばを選んで^{えら}入れなさい。

年 顔 口 頭 首 目 息 腕 饒舌 ^{じょうぜつ}

1. 小さい時、いつも母に（ ）ごたえをして、怒られた。
2. （ ）をとるのは、いいことだと思いますか。
3. 彼は、困ったように（ ）をすくめた。

4. 私は怖い映画のシーンを見て、() がとまりそうになった。
5. 難しい質問を、() をくんだまま考え続けた。
6. 交通事故を () のあたりに見て、ショックを受けてしまった。
7. 「嵐」のメンバーで、イケメンで、() かたちもきれいなのは誰だと思う？
8. 初めて彼女の父親に会った時、() をさげて、あいさつをした。
9. まゆみさんは、おしゃべりで、とても () だ。

II. 言葉の練習

気がする	大目にみる	きょとんとする	気味がわるい
ぶぜんとする	けろっとする	お愛想を言う	ぼーっとする

1. A: どうしたの？
B: ゆうべ、あまり眠れなかったので、今日は頭が () 。
2. あの家は、もう 20 年も人が住んでいないので、なんだか () 。
3. A: けんちゃんは泣きやんだ？
B: うん。さっきまで大声で泣いていたのに、今はもう () よ。
4. A: () 顔をして、どうかしたの？ 彼とけんかでもしてるの？
B: うん、私たちの出会った記念日を忘れて、その日に何もしてくれなかったの。
5. 彼が浮気をした！ でも、一回目だったので、() 、許してあげた。
6. あの人はいつも先生に () ので、好きじゃない。
7. カフェで隣に座っている人に前に一度会ったことがあるような () 。
8. ジョンは、先生に急に質問をされて、驚いて () いた。

III. グループを作って、順番に次の動作をしてください。

- ほんの少しだけ頭を下げてください。
- きょとんとした顔をしてください。
- そんなことは平気だと言って、笑い飛ばしてください。
- 気味が悪いところにいる振りをしてください。
- 初対面の人と挨拶をしてください。
- まじまじと隣の人の顔を見てください。
- 無然とした顔で、「知りません」と言ってください。
- 子供っぽく、すねた振りをしてください。
- あきれた感じで笑ってください。
- 首をすくめてください。

- 蚊の鳴くような声で、謝ってください。
- 今、あじけない料理を食べている振りをしてください。
- 隣の人にお愛想を言ってください。
- ぎょっとした顔で隣の人を見てください。
- 隣の人にそっと腕をまわしてください。

この練習時には、フィードバックの前に、まずペアワークなどの協働作業で答えを考えさせるように留意している。IIIのようなゲームの要素を入れたグループワークも行い、教師主導で、一方的に知識を詰め込むような形にならないように注意することになっている。これに加えて、まとめの短文作成シートを授業の終わりに手書きで書かせている。授業の最後に手書きで漢字を書くセッションも入れ提出させることで、「(キーボードで) 打つ」と「手書きで書く」のバランスが偏らないようにしている。

週後半の二コマ連続のクラスの一コマ目は、その週の教材を選択した発表者（ディスカッション・リーダー）によるディスカッションである。リーダーはその日までに

1. ディスカッションに必要な情報を集めて、まとめる。読み物の筆者について、
2. ディスカッションのテーマの背景について、本、雑誌、インターネット、統計資料などをできるだけたくさん調べて、発表原稿を作る。
3. レジюме（A4で1~2枚）とできればパワー・ポイントを作ること。
 - ① 作者やテーマの背景について／そのトピックを選んだ動機について
 - ② 内容の要約と内容チェックの質問
 - ③ ディスカッション・ポイントを最低5つ考える

以上のものを準備してくるよう指導する。当日、リーダーは、まず、クラスで15~20分くらいで、なぜこの読み物を発表に取り上げようと思ったかその動機／理由と今回のディスカッションの目的を説明する。小説であれば、作家について紹介してから、作品の背景やテーマについて説明する。それから、ペアワーク、グループワークで内容理解に関する質問に協働的に答えさせ、その後、ディスカッションのポイント（テーマ、内容、背景など）について質問し、クラスで意見を聞き、話し合いを行う。教師は余計な介入を避け、後半のディスカッションには一参加者として加わるのみで、クラスの主導権はリーダーにできるだけ任せようとしている。その他、リーダーが発表前に留意することは、自分の趣味嗜好に走りすぎないように注意し、クラスの皆が

読みたいと思うような分かりやすい発表にすることである。

雑誌 ELLE の記事「今シングル男性に何が起きているか？」で担当学生が準備してきた内容理解の質問例は、次のようなものである。

- バブル時代以降女性と男性はどういう風変わったか。
- 女一人養えない男性はどうだと言っているか。
- なぜ最近男性が結婚しなくても社会で認められるようになったのか。
- “草食男子”は時代にどう順応しているのか。
- この記事で男女が結婚できない理由は男性にあるか。それとも女性にあるか。またその理由は。
- さらに、日本で結婚できない理由は何だと書いてあるか。
- 今、世界ではどんな新しい結婚形態があるか。

リーダーは上記の質問について、まずペアで話させ、それから、全体に意見を聞く方法で皆の前でまとまった意見が述べやすくなるように工夫を凝らしていた。まず、パートナーと協働してピア・ディスカッションの中から自分の意見を日本語化することができるので、全体でのフィードバック時により円滑に活発に意見が述べられるという効果があり、普段おとなしい学生も人前でいきなり発話するというプレッシャーから解放され積極的に授業に参加しているように感じた。次に、ディスカッションに移行するのであるが、下記の例は、実際に学生が考えてきたものである。

- 一番印象的な所は？
- この記事の筆者は今の日本の状況を明確に把握していると思うか。
- 現代の男女が結婚できない理由は女性側にあると思うか。男性側にあると思うか。
- 恋愛と結婚は別だと思うか。
- 各国に草食男子がいるのか。

このクラスのディスカッション時には、「結婚していないと一人前ではないと思われていた時代はもう終わったか？ 結婚していないと職場で昇進できないって本当？」「なぜ結婚が人生で重要なファクターではなくなってきたのか？」「結婚は絶対にし

なくてはいけないものか？」「勝ち組、負け組、バツイチといった言葉についてどう思うか？」など活発な意見のやり取りがあり、50分の授業時間があっという間に過ぎてしまった。また関西外大留学生別科では、学部の日本人学生と留学生の交流も積極的に取り入れており、このようなディスカッションには学部の日本人学生を数名招くようにしている。日本人の学生が入ることにより記事を読んだだけでは具体的に掴めなかった日本人の生の声や実感もその場で知ることができ、記事に書かれている内容の信憑性もすぐに質問できるので、助かっている。

6. 終わりに：コース評価と今後の改善点等

コース後の授業評価は概ね好評である。コース終了時に行われる授業評価の過去2年半の結果を見ると、「このクラスで使用された読み物は適切であったか。」という設問に対し、回答者36名中29名(81%)が5段階評価の4以上(適切あるいは大方適切である)という回答であった。このクラスを履修して、「普段自分が読まない小説などを読むことができた、自分の世界が広がった」などという意見のほかにも、「小説を原文で読む自信がついた、もっと読みたい。他の作家の小説も読んでみたい」、「語彙・表現がたくさん覚えられた。」「自分で教材を選べて良かった。」「『GO』では、在日コリアンの問題など今まで知らなかった深いテーマについて学ぶことができた」「ディスカッションが楽しかった」などの意見が寄せられている。実際の回答コメントは下記の通りである。

- I believe this course was the best Japanese class I've ever taken. The course content and the material chosen was good and useful.
- Overall, I loved this class especially the discussions with the Japanese on Thursdays! I wish we had more of this kind of discussions!
- One strong point about the course was the extensive range of vocab acquired within reading comprehensions. It was especially useful to see the words in context. The in class discussions were also interesting and concreted in prior knowledge.
- It was a good mix of grammar/reading/kanji, and on the other hand we had discussions and wrote short papers. If you consider that we had only 3 sections per week, that's a lot! The class was just 最高!
- This was possibly my favorite Japanese class this semester. I loved the freedom we were

given with regard to how we learnt in class.

- This course was very flexible, and I think very appropriate for level 7. (Students could read materials they chose, express themselves through all of the ‘response’ activities we typed in the L.L. and so on.)
- Thanks teacher, I am very interested in your class. It’s very fun and useful to discuss together in class. Topics which were chosen by students themselves are also very interesting.
- I loved the readings we did in class, and from now on I’d like to read more Japanese novels not only to help my progress in Japanese, but because we were introduced to very intriguing stories during class.
- 自分が選んだ小説が教材になるのはとてもいいアイデアだと思います。先生のコメント（質問シートの）も非常に役に立ちます。
- I liked the weekly discussion of selected reading materials. It gave me the chance to use the vocabularies that I learned. The short essay writing is also a good way for me to organize and process what I learned.
- I think discussion with Japanese students is very nice and useful to me. I could hear their opinions. It’s easy to understand their culture and thinking.
- This course was awesome, and exactly what I expected from a level 7 class. The pace was challenging but not overwhelming and I was able to apply what I learned in class directly to my life outside of school. I especially liked the Thursday writing activities, and my writing has greatly improved as a result of them.

ネガティブな意見としては、「作者の書き方によって理解が困難だった」というものがあつたが、これは安部公房を取り上げた時であつた。またクラスメートが選んだ読み物について「作者の文体、カタカナ語、擬態語や英語と違う表現が難しかった」「記事や小説の主なアイディア（主旨）、作家の考えと内容のテーマが理解しにくく好きになれなかつた」などのコメントがあつた。教師に対しては、「もっと単語／表現使用の説明に時間を割いてほしかつた」「もっと漢字を書く練習がしたかつた」などがあつた。アカデミックレベルでの読み書きクラスということであつたので、パソコンで論文を書けるようになることに主眼を置いたが、漢字の書き取りなどに割く時間が多く取れなかつたことは確かである。また、特にアジア系の学生に散見されるコ

メントであるのだが、従来の教師主導で教師が決めた活動を教師の指示で行う練習、教師から受動的に知識を受け取る学習形態を好む学生が少数ではあるが存在していることにも留意しておくべきだと感じた。実際の学生からのコメントは下記の通りである。

- 読み書きクラスなのに、どうしてプレゼンがありますか。[その時間に]他の読解の練習をした方がいいと思います。
- I would prefer spending more time on kanji and grammar practices rather than discussion in class.
- Sometimes there are too many vocabularies depending on the choice of reading materials.
- Sometimes the pace of the course was too fast, so that it was difficult to follow everything that was explained by the teacher. I wish I had a little more time to think on how to resolve the assignment done in class and to listen to the teacher's explanation.
- The amount of vocabulary learnt was large but this was useful and helped me greatly expand my vocabulary and range of expression.

漢字学習と単語リストの単語の意味を調べることに関しては、個々の学生が個々のやり方で自律的に取り組むように促したが、単語を自分で調べることは時間の無駄であり完成した単語リストが与えられて当然だと考える学生もいた。またクラスメートが選んだりソースに対して攻撃的な態度を取るなどの行為もまれに観察された。また自分の学びたいことがわからないという学生、何でもいいから選んでほしいという学生も少数であるが存在した。このような学生にいかに関心の学習の責任は自分にあるという自覚を持たせるか、あるいは、いかに自律的学習を浸透させ定着させるかについては、決まった対応策がないので、やはり最終的には個々の学生に対してそれぞれ違った、教師のきめ細やかな対応が必要とされると感じた。また 50 分間でまとめた意見を小論文として仕上げるのに時間がかかる学生にとっては、かなりチャレンジングであったようであるが、コースが進むにつれ短時間で書けるようになる学生、最後まで四苦八苦していた学生などがおり、やはり千差万別であった。この問題についても、毎週の個々の学生への添削指導でそれぞれの学生の問題を見出し、最終的には個別に地道に指導していくしかないように感じた。

以上の反省点を踏まえ、アカデミックレベルでの漢字の書き方指導をどうすべきかという問題、また、学習者が主体的、自律的、自発的に学習を進められるような方法の更なる模索、学習者の興味関心に合致した読み物を教師の枠にとらわれずにいかに拡げていけるか、上級読解授業のための学習支援リソースとしてどんなものが適しているかなどについて今後も引き続き考えていきたい。また今回は紙面の都合で、評価法に関する議論ができなかった。現行では、毎週の単語クイズ、発表（ディスカッション準備）とレポート、授業参加態度、中間試験、期末試験等の結果を総合的に評価しているが、学習者が自分で教材を選び自分で目標を設定し、自分の学習に責任を持ち自己評価していくような方法（トムソン木下 2009）などを採用していくことにも今後取り組んでいければと考えている。

参考文献

- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編（2007）『自律を目指すことばの学習—さくら先生のチュートリアル—』 凡人社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉 編著（2003）『日本語教師のための知識本シリーズ③ 人間主義の日本語教育』 凡人社
- 江田すみれ・飯島ひとみ・野田佳恵・吉田将之（2005）「中・上級の学習者に対する短編小説を使った多読授業の実践」『日本語教育』 126号 pp.74-83.
- 田中望・斉藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』 大修館書店
- トムソン木下千尋 編（2009）『学習者主体の日本語教育 オーストラリアの実践研究』 ココ出版
- 伴紀子（2003）「学習ストラテジーは学習の過程でどのように変化するか」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』 明治書院
- 伴紀子 監修・宮崎里司 編著（2009）『タスクで伸ばす学習力 学習ストラテジーを活かした学びの設計』 凡人社

mtakayas@kansai.ac.jp